

災害救助に向かう空母ロナルド・レーガンの艦上で

日本側に対して怒り心頭に発する前に、米国政府と核産業が、まったく同じくらい悪いのだ、ということ覚えておいてください。

また、日本の核政策の大部分に命令しているのもアメリカなのだということも。

以下は、裁判所ニュースサービスの報告書から。

米国空母・ロナルド・レーガン（母港はサンディエゴ）の8人の乗組員は、米連邦地裁に東京電力に対する訴えを起こした。

彼らは、この電力会社（それは日本政府の完全子会社ともいうべき公益事業会社）が、米国海軍が騒がないように、あたかも安全であるかのように思わせるため、不正確な情報を出していたと主張している。

原告側の中心であるリンゼイ・クーパーは、2011年3月10日（時差から米国時間では3月10日になる）の地震と津波が核災害を引き起こした後、環境中には危険なレベルの放射能が存在していたにもかかわらず、日本の沖合で活動していた米国海軍の救助隊に、その事実を伝えることなく、故意に隠蔽したと主張している。

「この8人の原告団を含むレスキュー隊を、福島第一原発近くの決して安全とはいえないエリアに突入させる原因となったのは、東京電力が進めた政策によるものです。東京電力が、人間の健康と安全性について、意図的に誤報を流したことによって、米国海軍は安全であると錯覚させられしまい、これに注意を払うことがなかったのです」

と申し立てた。

.....

「8人の乗組員のうち6人は、航空母艦のフライト・デッキ上で活動していました。残りの2人は、汚染された大気中で、あるいは外での作業に従事していました」と、ある乗組員が、※自分の幼い娘に成り代わるような形で訴えた。

（※トモダチ作戦に参加した後に生まれた生後7ヶ月になる赤ちゃんも今回の訴訟の被害者リストに入れられている）

日本側は、救援活動「ともだち作戦」を要求した。

申し立てのポイント：

被告である東京電力と日本政府は、福島第一原発から放出された放射能の拡散は、原告の8人に

何ら脅威をもたらさなかったという幻想を創り出すために、多くの事柄において、共謀し陰謀を働いた。

東京電力は、米空母・ロナルド・レーガンの艦上で、与えられた任務をこなしていた被告人たちに、とてつもない危険をもたらしていたという情報を出さなかったどころか、不完全で事実とは異なる情報と認識していながら、それをばら撒いていた。

東電の利益、そして日本政府の利益を促進するために。

(日本政府の公式の調査結果でさえ、政府の原子力安全・保安院と東京電力の「共謀」であることが判明したとしている)

《付記:》

「被告である東京電力は、原告が曝された放射能汚染のレベルは、原告にとって有害であるとは言いがたく、また、トモダチ作戦を遂行している間、原告たちが過去のミッションで経験した以上の大きな害を受けたとは言えないとの考えを示し、それについては間違いのないことである」と述べている。

被告、東京電力は、どんな場合においても、低線量の放射線に照射されれば、それは人の健康に危険を生じるということ（それは事実である）、そして、実際の危険レベルを正確に報告することが重要であるということを知っていたはずである。

.....

また、彼らは次のように述べている。

「被告、東京電力は、いったん環境中に放射能が放出されてしまえば、放射能は遠くまで広がって、原告たちに集中して害を与える原因となることを確信しており、東京電力は、そうした放射線の特徴を知悉していたと考えざるを得ません」。

原告は、日本政府が故意に彼らに対して、錯誤を生じさせたと主張しているのである。

「日本の政府は、米空母・レーガン、そして乗組員への放射能汚染の危険はないと言い続けていました。『すべてはコントロールされている』、『すべては順調だ、我々政府を信じていい』…。また、『直ちに危険はない』、『福島第一原発の原子炉はメルトダウンしていない』などと真っ赤なウソをつきながら、『人命に対する脅威はない』と言い続けていたのです」。

(日本政府は、放射能が出ていることを人々に隠していましたが、メルトダウンと放射能漏れの情報については米軍と共有していたと言われても)

「原告と彼らを乗せた空母がトモダチ作戦に就いていたエリア内に、より高い放射線が存在してい

たことを被告側は知っていたのです。こうした報告が出されると同時に、被告である東京電力は、自分の組織内には広く知らせていたのです」。

「そのとき、被告側が独自に知っていた既存データには、トモダチ作戦の活動地域内で原告が浴びた放射線被曝量は、すでに、チェルノブイリ原発から今回と同じ距離離れていたところに住み、後にガンを引き起こす結果となった住民と同じ被曝量に達していたことが示されているのです」と原告側は申し立てている。

乗組員たちは、「もはや回復不能な害と向き合わざるを得ず、自分たちの寿命は縮められ、元の状態には戻すことができない」と言っている。

(下の) ビデオには、地震の発生後、放射性プルームをくぐりながら救助に向かう空母・ロナルド・レーガン艦内にいる乗組員たちが出てきます。

http://www.youtube.com/watch?feature=player_embedded&v=Xk6Sy1cNgXo

このビデオを撮影した乗組員は次のように説明します。

Radiation Scans

「これは、私たちが、毎回、フライト・デッキから戻ってくるときに通らなければならないことです。ここはフライト・デッキからのただ一つのエントリー・ポイントです。

ここは忘れられないポイントです。

00:05 のあたりです。

これは、大量の放射線に曝されたときに起こることです。

次は、ビデオの 02:10 のあたり。

(ピーという大きな音を出す放射線検出器)

『これは、とんでもないぞ！ くそったれ、今の聞いただろ？』。

次は 02:45 のあたり。

『もう尋常じゃない。核のホロコーストだけじゃない、こんなこと、人生で二度三度あることじゃない』。

『我々は死ぬだろう。だからビデオを撮っている』。』…

.....

このビデオでは、乗組員たちがこんなことを言っていたのです。

しかし、確実にいえることは、日本政府と東京電力なら、彼らが行っている意味が分かるだろうということです。

絶対とはいえませんが…。

(全文訳終り)

引用元 <http://kaleido11.blog111.fc2.com/blog-entry-1761.html>